

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号

※ 甲 第

号

氏

名

王 占一

論 文 題 目

雑誌『満蒙』における文芸とその時代

——在満日本人の満洲観を視座にして

論文審査担当者

主査	名古屋大学	准教授	日比 嘉高
委員	名古屋大学	教授	飯田 祐子
委員	名古屋大学	教授	池内 敏
委員	武庫川女子大学短期大学部	講師	小泉 京美

論文審査の結果の要旨

[本論文の概要]

本論文は、旧満洲において刊行された雑誌『満蒙』についての研究である。在満日本人によって刊行された『満蒙』（前身の『満蒙之文化』を含む）は、1920年に創刊され、1943年まで全281号にわたって刊行された満洲地域最大の総合雑誌である。本論文は、同誌の文芸に関わる記事を通覧した上で、旅行記や翻訳、小説、戯曲などを取り上げ、書き手たちの「満洲観」「満蒙観」を考察した。

雑誌『満蒙』とそこに掲載された文芸を概観する充実した序章の後、第1部の「調査された満洲——「満洲国」成立前の紀行文、翻訳、歌謡」では満蒙地域が調査の対象として位置付けられていた時代を考察する。第1章の「「富源」としての満蒙——戦前の旅行記」では、同誌掲載の紀行文を対象とし、富源としての満蒙が造型されていくようすをたどった。第2章の「「支那像」を求める——在満日本人による中国民謡の翻訳と創作」では、『満蒙』および同時期の単行著作に翻訳紹介された中国民謡を分析した。在満日本人は、1920年代には中国民謡の翻訳・創作を通して中国人の価値観を理解しようとし、「満洲国」成立後には「王道楽土」「民族協和」の理念を鼓吹する満洲新民謡を創作していた。第3章の「翻訳手法から見た「支那趣味」——柴田天馬の和訳『聊齋志異』」では、柴田訳『聊齋志異』を取り上げ、柴田がルビと訳注を駆使しながら原文の持つ意味合いを残すだけでなく、より広く中国の民族文化そのものを伝えようとしていたことを考察した。

第2部の「宣伝された満洲——1930年代の小説、戯曲」においては、小説と戯曲を取り扱い、「満洲国」成立後の「建国宣伝」のありさまを分析した。第4章の「「満洲国」の中のスパイ／スパイ戦——近東綺十郎のスパイ小説『間諜・茉莉—映画小説風—』」では、当時の諜報戦を背景とした小説を分析し、主人公茉莉が英雄として語られる意味を考察し、茉莉の父親が日本人であり母親が満洲人であるという設定と、「五族協和」理念との関係を論じた。第5章の「「満洲国」の成立と「建国宣伝」——大庭武年の戯曲創作」では、満鉄社員であった作者の経歴を追跡しながら、大庭の戯曲を分析し「満洲国」の国策との関係を考察した。

第3部の「問題視された満洲——1940年代の随筆、紀行文、同人雑記」においては、雑誌の編集体制の変化に着目し、旅行記と「同人雑記」を考察した。第6章の「北満洲の世相を見る——田口稔の旅行記」では、1930年代後半の旅行記には作者の抒情が強く現れ、地理的な情報に加え、当地の人々の生活も詳述する特徴があると指摘した。第7章の「文化建設と物質生活との間の乖離——満蒙社と「同人雑記」」では、雑誌同人の求めた「文化の宣布」と中国の下層民衆の「物質生活」の困難との間に鮮明な対立が存在していたことをあきらかにした。

結章では、雑誌『満蒙』の文芸面の変化をまとめた上で、1920年代から1940年代までの在満日本人の「満洲観」「満蒙観」の変化を整理した。

論文審査の結果の要旨

[本論文の評価]

雑誌『満蒙』は、在満洲の日本人が刊行した大規模かつ長期にわたる総合雑誌である。すでに復刻版も刊行されており満洲研究において言及されることも少なくないが、刊行点数が多いこともあって、従来は個別の話題に関わる研究にとどまってきた。本論文は、文芸に関連する記事という制限はあるものの、全期間を通じて同誌を検討し、その特徴を実証的に明らかにした論考である。

本論文の評価に値する点は大きく二点に集約できる。一つは、20年以上にわたって刊行されつづけた総合雑誌『満蒙』を正面から取り上げ、誌面の歴史的な変化を跡づけ、その意義を論じた点にある。とりわけこの作業によって従来手薄であった1920年代の満洲文芸のようすが、より詳細に明らかになったことは評価に値する。

二つめは、満洲文芸を著名作家だけでなく、無名の同人作者たちまで広げて調査し、雑誌『満蒙』および在満日本人の文筆活動の厚みを示した点である。また分析が旅行記や民謡、小説、翻訳、戯曲、同人雑記など幅広いジャンルにわたって行われているところにも特色がある。これによって、当時の調査活動や市井の人々へのまなざしなどといった総合誌らしい側面に考察が広がる結果となり、著者の目指した「満蒙観」の解明を成功に導くこととなった。

個別の論考としては、第2章の在満日本人による中国民謡の翻訳を論じたもの、そして第3章の柴田天馬による『聊齋志異』の日本語訳を考察した論文に、審査員の評価が集まった。前者は、これまで日本・中国いずれにおいてもまったく考察されてこなかった戦前戦時下の満洲地域における中国民謡とその日本語訳の試みを取り上げ、地域色、婚姻、婦人、日本への抵抗などといった具体的な事例にわたりながら、その実態を明らかにしたものである。第3章は1927年から1943年まで一度も欠かさず『満蒙』に連載された柴田訳『聊齋志異』を取り上げ、彼の訳文とルビ、訳注の時代的变化を考察し、翻訳活動の変遷を跡づけたものである。意味ルビを発展させた「故事ルビ」や、科挙と秀才への着目、他の同人と比較した文学者柴田天馬の特異性などを論じながら、彼の訳業が『聊齋志異』を翻訳しつつ中国の文化や伝統民俗、国民性をも伝えようとしていたと評価した。

ただし、本論文にも問題点がないわけではない。長大な雑誌を通観していった努力の一方で、個々の分析の深度においてはやや素朴な読み取りに傾く傾向があったことも確かである。また審査委員からは「調査」という言葉の当時の文脈における内実をよりはっきりさせること、雑誌という「場」自体について考えることの必要性が指摘され、俳句や短歌など短詩形文学との関わりにも考察の可能性があるという期待も寄せられた。これらの課題は残るものの、上述した本研究の達成は揺るがない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。